



# 膨大な研究データは「読む」から「対話・探索」へ

## — R&D×生成AIの現在地と次世代知財戦略

# R&D生成AIが引き起こす3つの地殻変動



## 【効率から発見へ】

検索コストの削減はすでに実証済み。次の焦点は、異分野の知見を融合させた「思いもよらない新テーマ」の創出へ移行している。



## 【手法の二極化】

即効性を求める「SaaS活用（花王など）」と、独自性を追求する「内製LLM・MI連携（ライオン、資生堂など）」へ、企業の選択が明確に分かれか始めている。



## 【知財の再定義】

生成AIは「情報漏洩の増幅器」になるリスクを孕む一方、適切に統制すれば「埋もれた発明の自動発掘マシン」へと変貌する。

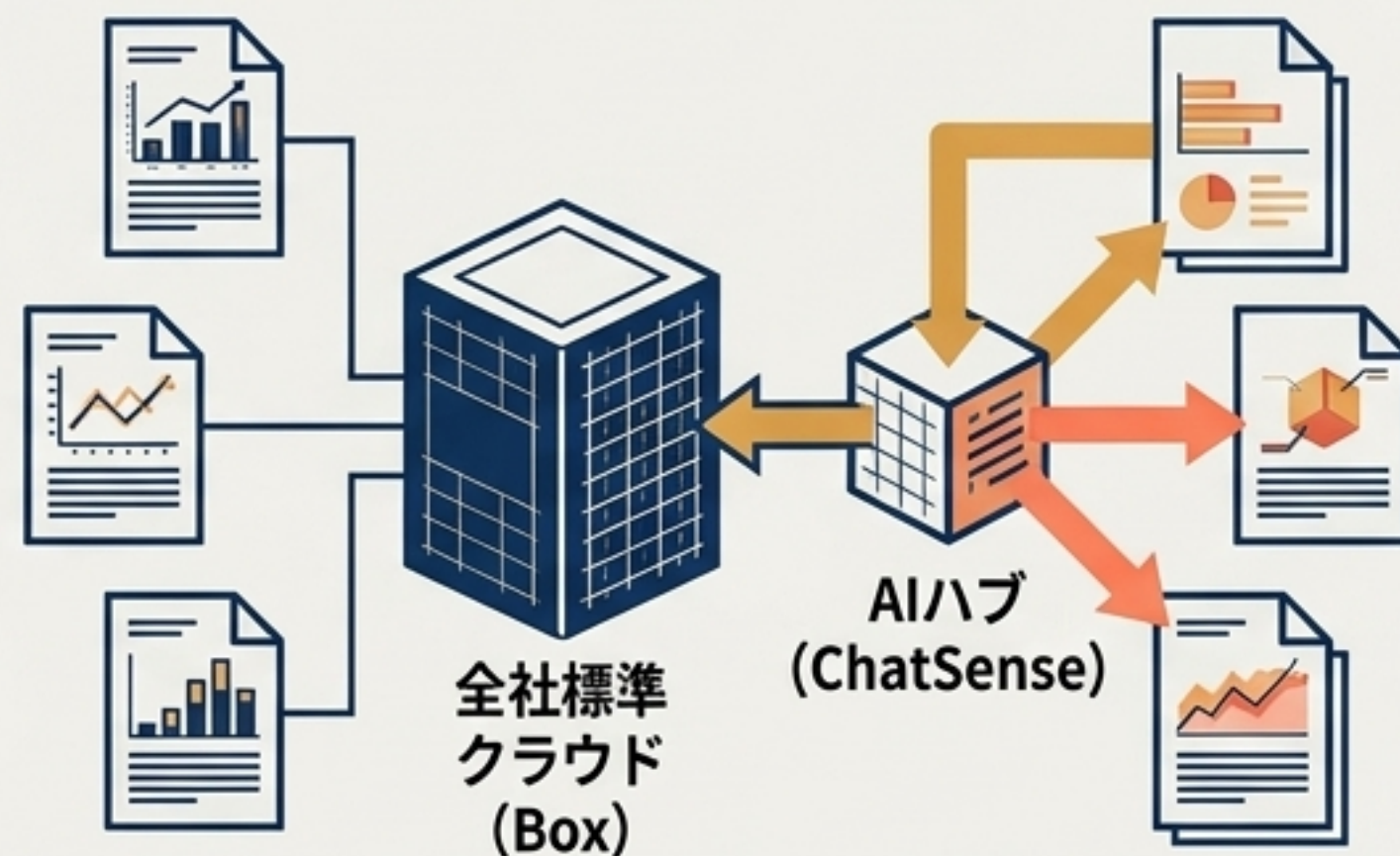
# 花王が直面した「知のサイロ化」とBox連携による突破

## Before: 検索の網からこぼれる知



キーワード検索では大容量の図表入り報告書を読み込めず、異分野の知見がサイロ化

## After: データ移動ゼロの対話探索



Box上のデータを動かさずに、AIが大容量文書から関連知見を抽出し「思わぬ知見」として提示

**【定性的効果】** 他研究所の「思いもよらない知見」への到達と、異動直後の担当分野の迅速な把握

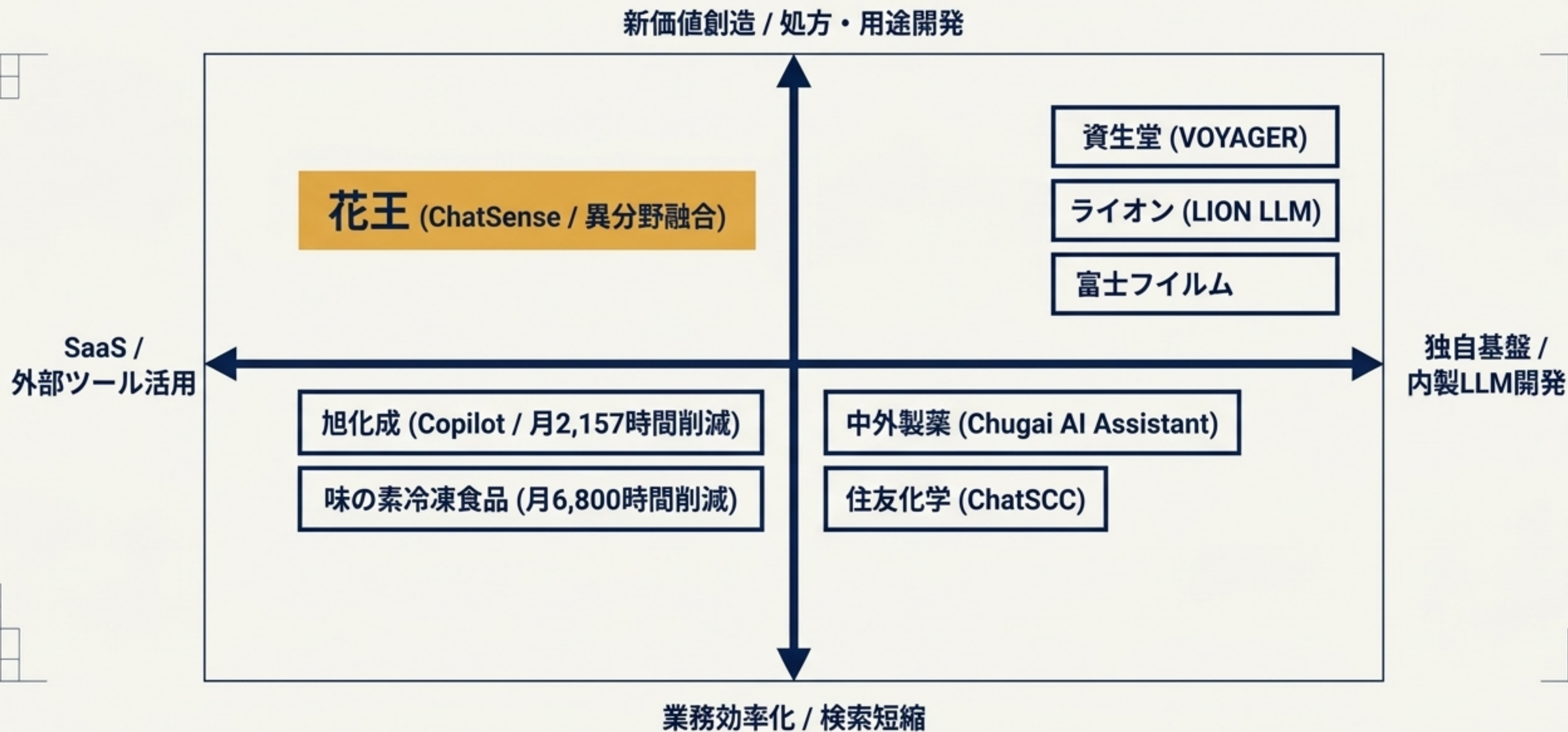
# 花王のAI・データ戦略アーキテクチャ（3層構造）



インサイト: なぜ全社  
AIがあるのにR&D専  
用SaaSを導入したの  
か？

ゼロからの開発を避け、Box  
連携と大容量データ対応とい  
うR&D特有の要件を  
「作るより早く使う」ための  
戦略的判断。

# R&D×生成AI アプローチ比較マトリクス



総括：基盤のコモディティ化により、SaaSで迅速に立ち上げ用途に特化する「花王・味の素型」がひとつの最適解として成立しつつある

# 先行事例ハイライト：効率化の実証から「発見」へのシフト

**Lion**

## 【ファクトと網羅性の分業】

内製「LINK Chat」と「LION LLM」のハイブリッド。ファクト確認はLLM、ファクト確認はRAG、回答の網羅性はLLMが担保。

文書取得時間を約1/5に削減

**Shiseido**

## 【異分野技術の掛け合わせ】

処方開発AI「VOYAGER」。50万超の研究知見から「クレンジング×スキンケア」の異分野技術を掛け合わせ。

新規試作処方に成功  
(2026年発売予定)

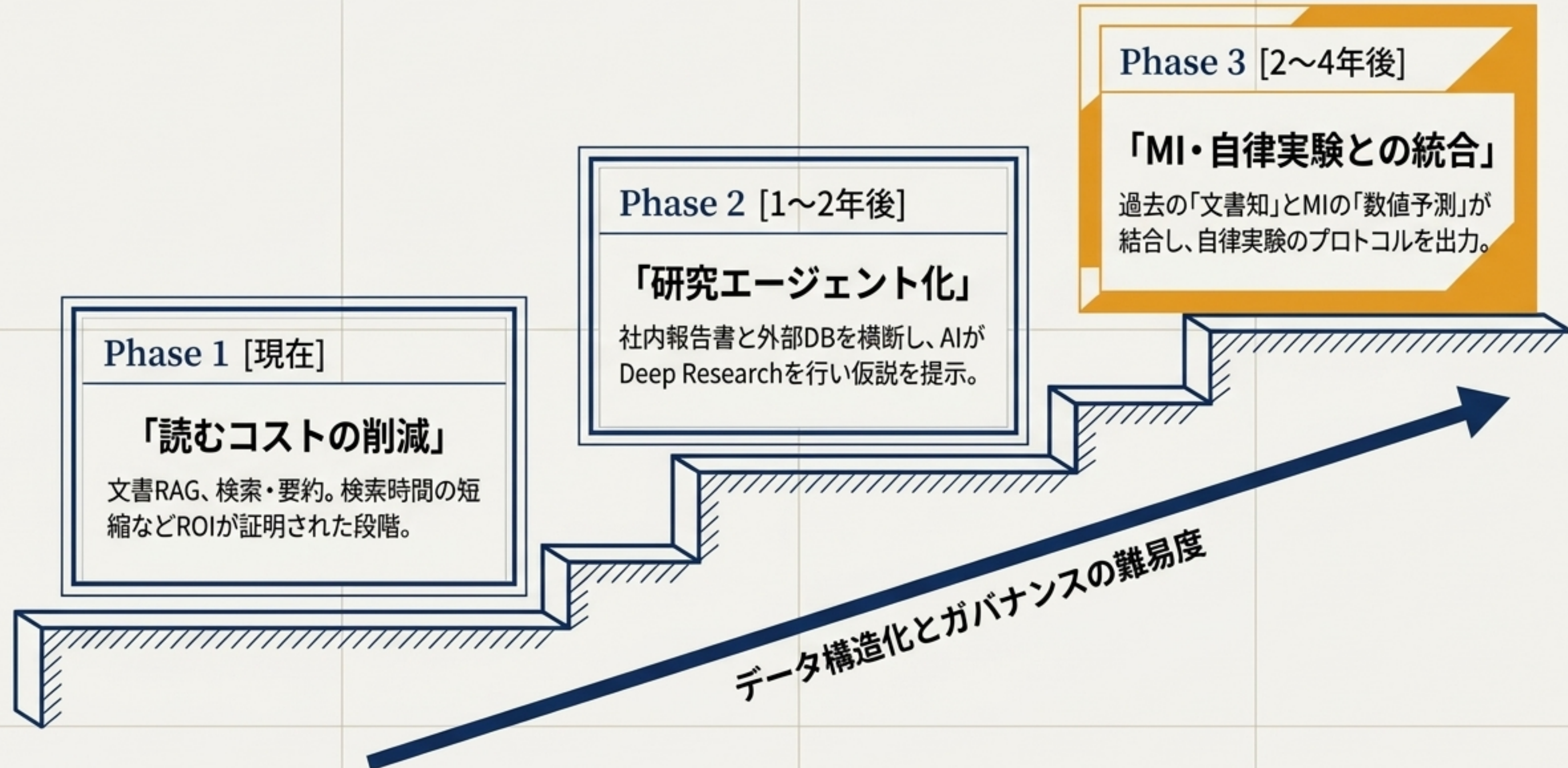
**Unilever**

## 【グローバル15万件の横断】

「R&D Assistant」。各自の母国語で1世紀分の文書を照会。

処方サイクルを5～6回  
から1～2回へ大幅短縮

# R&Dデータ活用の成熟度モデル (3フェーズ)

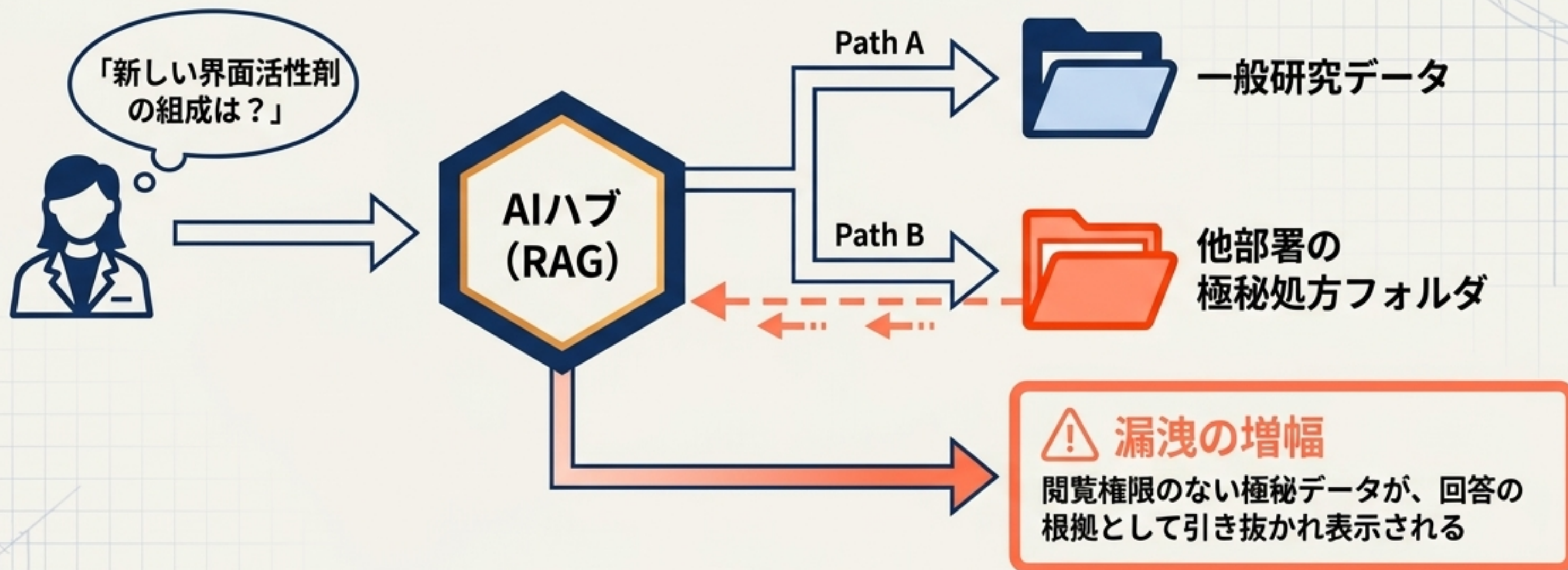


# 究極の結合：テキスト（暗黙知）と数値（予測）の交差点



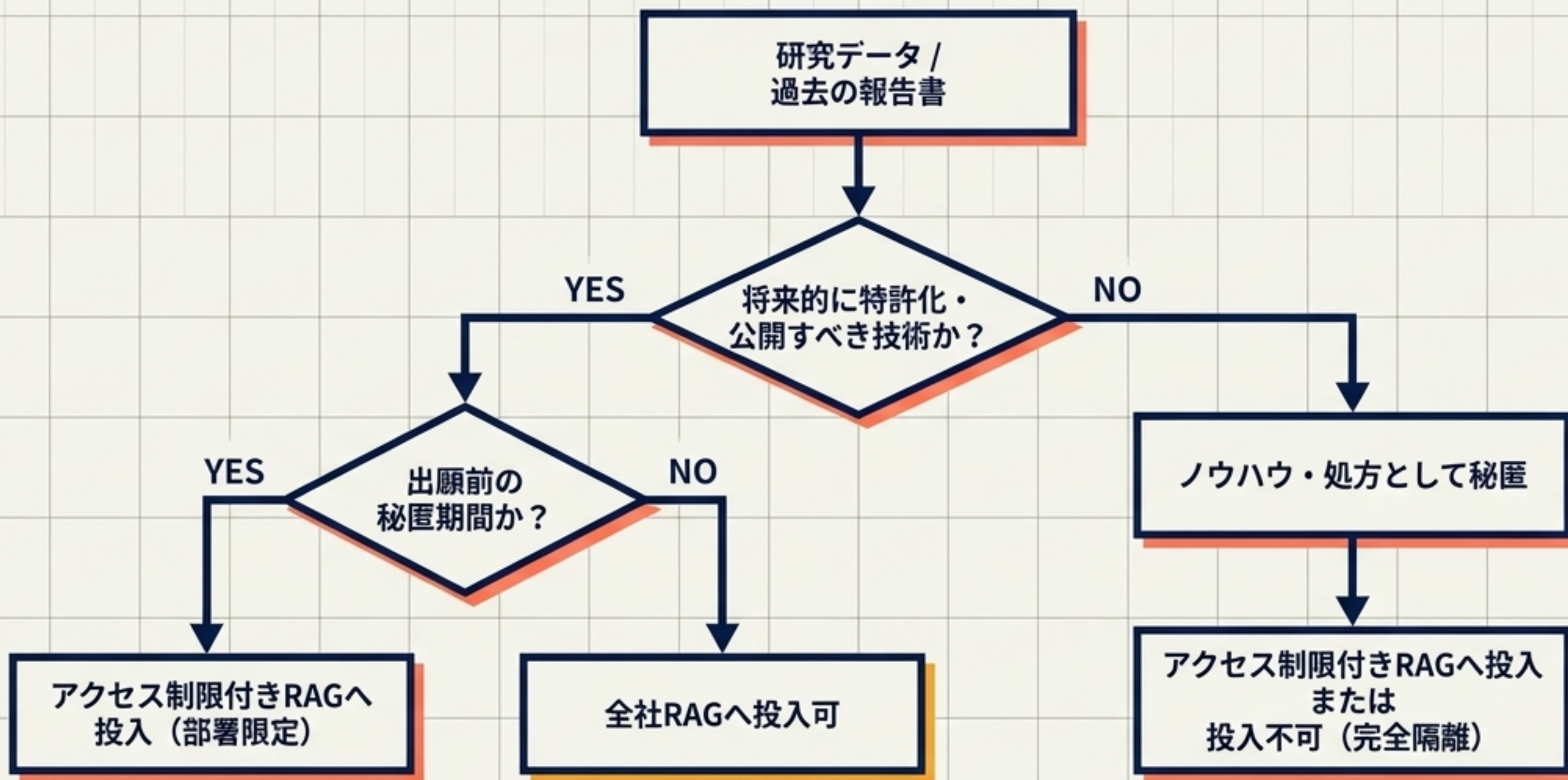
インサイト: 次なる勝負はAIの性能ではなく、「失敗の理由」を含む研究報告書をいかに構造化し、MIに食わせるデータ基盤と直結させるかにある。

# RAGの「両刃の剣」：アクセス権限の甘さが招く 営業秘密の危機



RAGは社内データを網羅的に探索するため、大元のデータ保管場所（Box等）のアクセス権や秘密表示が厳密でなければ、不正競争防止法上の「秘密管理性」が喪失するリスクがある。

# R&Dデータの「オープン・クローズ」再設計ツリー



RAGによる社内流通性の向上が、知財部によるデータ投入前の「スクリーニングと分類」の重要性をかつてなく高めている。

# AI関与発明の死角と社内規程のアップデート（DABUS判決の余波）

## 【Legal Fact】

### 法的事実



2026年3月 最高裁確定（DABUS事件）

現行法において、AIの発明者性は認められない。特許法上の発明者は「自然人」のみであることが前提となる。

## 【Corporate Action】

### 企業の対策

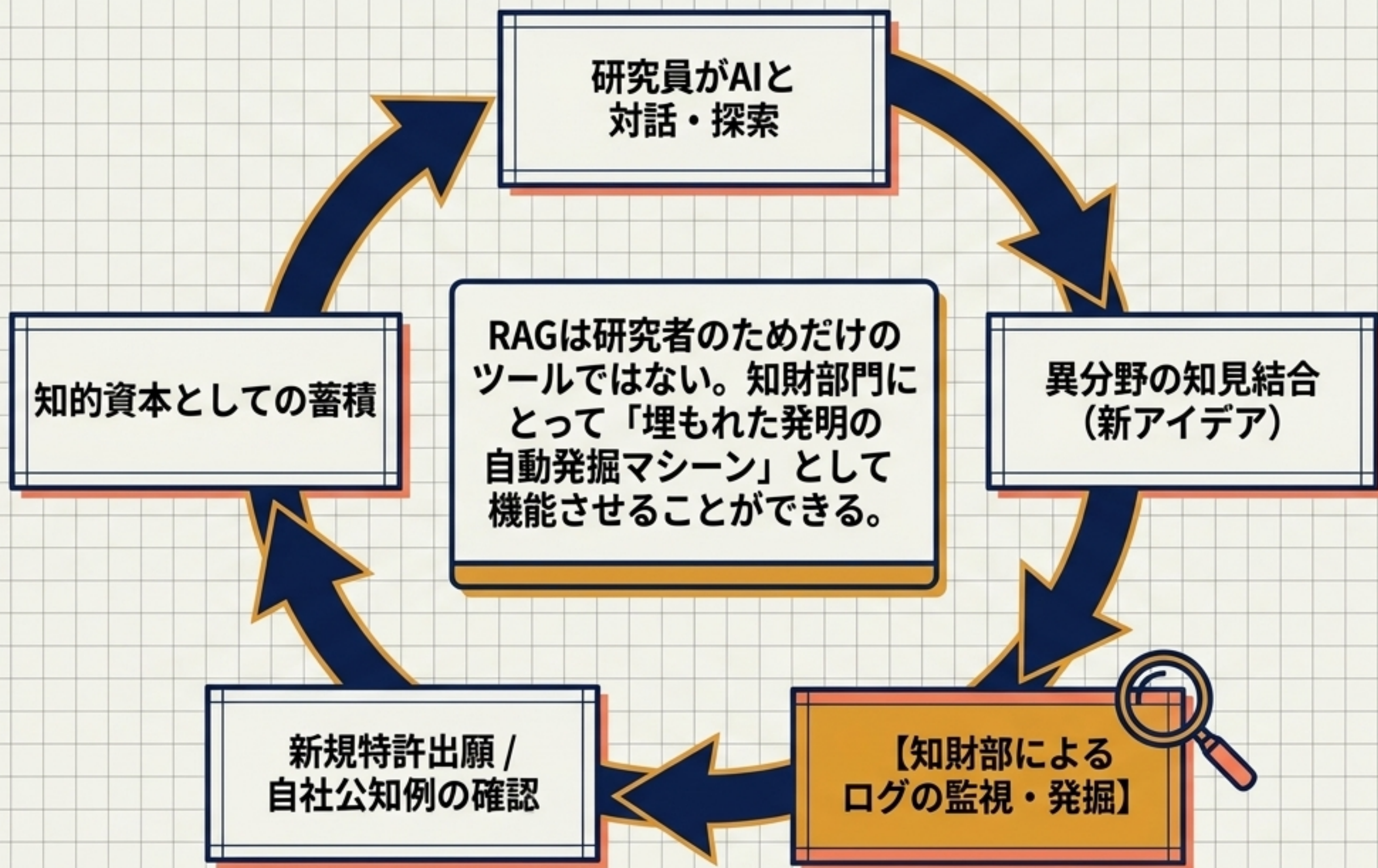


AIとの対話による着想を「自然人の発明」として成立させるための規程化

花王のAIガバナンス方針は「第三者の権利保護」が主眼。知財部門は自社の権利保護のため、以下のルール化が急務となる：

1. AIとの対話ログの証拠保存
2. 発明届への「AI寄与度・人間の着想プロセス」の明記

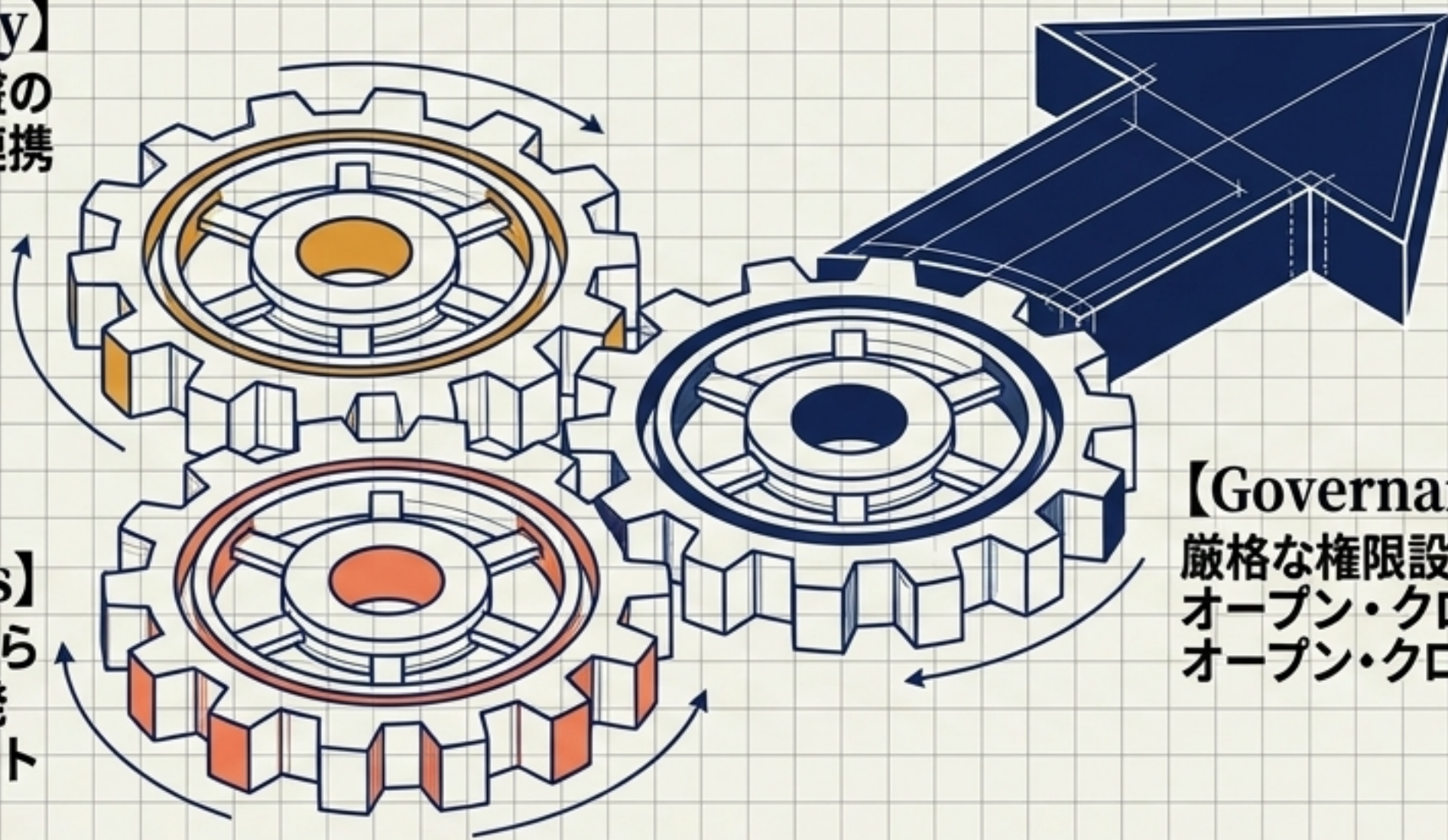
# 攻めの知財：「思いもよらない知見」を自動発掘する



# 統合アーキテクチャ：The New Blueprint for R&D AI

【Technology】  
SaaSと内製基盤の  
ハイブリッド、ELN/MI連携

【Business】  
「検索効率化」から  
「異分野融合・新価値発  
見」へのシフト



研究データの資産化と  
知的資本の開示

【Governance】  
厳格な権限設計 (Box)、  
オープン・クローズ戦略、  
オープン・クローズ戦略、AI発明規程

競争優位の源泉は「どのAIツールを使うか」を終えた。これからの勝者は、  
自社の研究データをどう構造化し、権限を設計し、知財として保護・開示するかという  
「データアーキテクチャとガバナンス」を制する企業である。

# リーダーシップのためのアクション・チェックリスト

## 【Data & Tech】

- ☐ 導入するAIツールと、既存の構造化データ（ELN/LIMS/MI）の連携ロードマップは描けているか？
- ☐ 自社のニーズはSaaSによる即効性か、内製による独自モデル構築か、合意されているか？

## 【Governance】

- ☐ 社内DB（Box等）のアクセス権限と、RAGの参照範囲は厳密に一致しているか？
- ☐ 営業秘密（秘匿ノウハウ）と特許化対象を、AI投入前に分類するプロセスはあるか？

## 【IP Strategy】

- ☐ AIを起点とした着想から、発明を抽出・記録するプロセス（対話ログ保存等）はあるか？
- ☐ AIの関与と人間の寄与度を切り分ける社内規程（DABUS判決対応）は整備されているか？

自社の「知の設計図」を、今日から描き直す。